

# 漢詩創作授業の取り組み

——漢字への興味付けからインターネットを利用した生涯学習へ——

鈴木 木 淳 次

(愛知県立半田東高等学校)

## 一 高校生が漢詩を作るということ

長年、高等学校で国語の教育に携わってきたが、韻文・散文を問わず、生徒の創作活動に対する指導の不足を痛感している。現代文の授業では、短歌や俳句の鑑賞を終えた時に、「さあ、今度は君達も作ってみよう」という課題を与えたりもするのだが、正直な所は作らせつ放しで、せいぜいプリントにまとめるくらいのものである。勿論、体裁そのものの誤り(例えば、短歌を五七五七五で作る者が必ずクラスに数名はいる)程度なら指導も出来るが、それ以上の、内容や表現面に対する指導となると適切なマニュアルも無いためお手上げで、「時間不足と力量不足」という弁解に逃がっているのが実状である。

ましてや、漢詩の場合は、創作に行く前段階として要求される基礎知識が多い。漢文の構造、返読・再読文字、基本的な句形、著名な作品の理解、特に漢字一字一字の意味を知っていないと、なかなか自分で漢詩を作ることとはできない。今、私は「基礎知識」と述べたが、高校三年間でその基礎が身につかない生徒が圧

倒的に多いわけで、さらにその上に平仄や押韻を求めるとは、どう考えても無理な話、「生徒の漢詩創作」などは私も以前は考えもしなかった。

だが、この十年程、生徒達の漢字力の急速な低下を感じることも多くなった。漢字の意味を全く考慮しない宛字や誤字、平仮名にとつて漢字は既に「表音文字」と化しているのではないか、そんな絶望的な思いに沈むこともしばしばある。しかし、現場の「国語科」教員としては、嘆いてばかりいるわけにもいかないだろう。漢字一字一字の意味や用法に対する知識の必要性を自覚できるような、少しでも漢字への興味や関心を育て得るような、そんな方策はないだろうか、というものがきの中での一つの試行がこの「漢詩創作の授業」である。

漢字だけを用いて(漢文で)風景や自分の心を表現する「漢作文」でも効果はあるだろうが、一句の字数や句数、可能ならば押韻や平仄といった規則や制限が多くなれば、それだけ一字一字の意味を意識しなくてはならなくなる。大切なのは、漢詩創作を通

して何を身につけさせるか、である。私の当面の目標は「漢字の意味に対する興味付け」であったが、勿論、「漢詩により興味を持ち、自己を表現する手段として漢詩を選択できる生徒を育てる」という最終目標だつて心の中にはある。だが、大げさに考えずに、差し当たつての目標でまずは始めてみれば良いのだ。

## 二 創作漢詩への第一歩

漢詩創作の授業計画を立てるに当たつて一番に不安だつたのは、果たして現代の高校生が漢詩を作ることに興味を持つのかどうか、また、漢詩にするような体験（感動）を個々の生徒が持っているのだろうか、ということだつた。ただでさえ普段から文章を書くことを嫌がる彼等だから、「えー、やだー!」とか、「面倒くせー」という教室のざわめきの場面は十分に予測できた。

となると、制約はできるだけ少なくした方がよいだろう。しかし、逆に何でもありの自由詩では意欲が湧かないかもしれない。どのようなレベルまで「漢詩」に近づけて創作させるか、という目標設定で随分悩んだが、結局、初めは、押韻、平仄、欲張つても無理なことはあつさりと切り捨てた方がよい、ということの方針とした。従つて、

(1)形式については、五言・七言の絶句・律詩とする。

(結果的にはほとんどの生徒が五言絶句で創作した。)

(2)押韻については、原則として踏むこととする。但し、全ての韻目を生徒が調べることは不可能だろうから、韻字表から生徒が使いそうな字を選んでグループ分けをしたものを示して、それぞれのグループ内から韻字を選ぶように指定した。

### 漢詩創作用紙

三年間の漢文の勉強のまとめとして、各自で漢詩に挑戦してみよう。

「創作上の規則」  
 近体詩を作る上では、いづつかのナルがあるが、今回は次の点だけに気をつけよう。  
 ①五言詩の場合は、○○○のリズムで、七言詩の場合は○○○の○○○になるように。  
 (例)

昔聞く洞庭水  
今上る岳陽樓

親朋無一字  
老病有孤舟

千里鶯啼綠映紅  
水村山郭酒旗風

昔聞く洞庭の水  
今上る岳陽樓

親朋一字無  
老病孤舟有り

千里鶯啼映紅  
水村山郭酒旗の風

②韻については、五言句は偶数句末に、七言句は初句と偶数句末に、後の各グループ内の字を組み合わせる。③(例)次の例を参考に、④印の字については同じ群内の字を用いること。

五言絶句の時

○○○○○

○○○○○

○○○○○

○○○○○

五言律詩の時

○○○○○

○○○○○

○○○○○

○○○○○

○○○○○

○○○○○

七言絶句の時

○○○○○○○

○○○○○○○

○○○○○○○

○○○○○○○

七言律詩の時

○○○○○○○

○○○○○○○

○○○○○○○

○○○○○○○

○○○○○○○

○○○○○○○

④それぞれの群の中の字は、同じ韻として使うことが出来るものである。

⑤この他の字を渡したい人は、申し出ることとする。

⑥文法等は細かく見ないので、自分の思いを漢字だけで表現することを心がけよう。

第一群 東・西・南・北・中・東・西・南・北・中  
 第二群 天・地・風・雨・雲・霧・雪・霜・露・霧・雪・霜・露  
 第三群 春・夏・秋・冬・年・月・日・時・分・秒  
 第四群 山・水・川・海・江・湖・池・潭・井・泉・井・泉  
 第五群 花・鳥・魚・虫・草・木・竹・石・土・瓦・磚・瓦・磚  
 第六群 朝・夕・夜・日・月・星・雲・霧・雪・霜・露・霧  
 第七群 晴・雨・雪・風・雲・霧・雪・霜・露・霧

( ) 組 ( ) 番 ( )

白文

書き下し文

詩の大意と自分の感想(必要ならば口語訳をしても良い)

(3) 平仄については、全く問わない。

(4) 漢文法については、可能な限り合わせるが、それによって生徒の自由な表現が制約されることは避けたい。「漢字だけで詩を書き表す」という目標で、適宜指導することとする。

以上の私自身の確認の下、平成九年度の三年生に対し、資料1のプリントを配布し、私の漢詩創作授業の第一歩が始まった。

二学期末の定期考査後から冬休みまでの短い期間での展開であり、生徒が準備に費やした時間はほとんどないと思う。テストの答案を返した授業の最後に、次時の予告として、「次の授業では漢詩を作ってもらうので、漢文法のテキストと漢和辞典を持ってくるように。最近感動したことを何か思い出しておくこと」と指示した程度であり、生徒はこの授業で初めて書き始めた状態である。

プリントの①から④までを十分程説明しておいて、すぐに「さあ、始めよう」という乱暴な展開であるが、個別に質問に対応するというところで、机間巡視を続けた。大半の生徒は興味を持って取り組んでおり、私が近くに行けば気軽に質問をした。

質問の中で主なものを分類すると、

#### 〈形式に関する質問〉

・二句目の最後をこの字にした時に、四句目の韻字にどんな字が使えるか。

・対句にしたいのだが、うまくいかないのどう並べるか。

#### 〈用語に関する質問〉

・これこれのことを言いたいのだが、どういう漢字や熟語を使えばいいのだろうか。

・同音異義語の区別がつかないので、どっちの字を書いたらいいのか。

#### 〈漢文法に関する質問〉

・反語形や再読文字を使ったのだが、これで通じるだろうか。  
・韻の関係で述語と目的語の順序があわないのだが、どうすればよいか。

#### 〈表現に関する問題〉

・これで起承転結になっているか。

・こういう気持ちを書きたいのだが、どうもニュアンスが違う。

・この二重否定はどっちの意味になるのか。

など、こちらが予測した以上の内容の質問が続いた。

具体的な言葉や漢字を前にしながら、私も生徒も辞書を引き、「こういう字もあるから、使ってみたらどうか」「ここここを代入れ替えた方が、もっと意味がはつきりする」「この再読文字よりもこっちの方が内容と合うだろう」と、日頃の授業では思いもよらない（私としてはハイレベルと思える）やりとりをした。勿論、中には「せんせい、分からん」「こんなん、作れん」と叫ぶ子もいるのだが、そういう生徒も副教材を開いて句法を調べたり、辞書を当てもなく読んだり、それなりの取り組みはしていた。最終的に、二時間の授業内では完成せずに白紙で提出した者も居たが、その白紙には何度も消しゴムで消した跡が残っていた。

この時に生徒が作った詩は、私の感想も添えてまとめて印刷し、生徒に配布した。同級生の作品ということで興味を抱いて熱心に読んでいた。（資料2）

この創作授業を実施したクラスは、漢詩のきまりにしる句法に

しろ、そうした基礎知識の定着率が決して高い方ではない。むしろ、「せめて再読文字の十個くらいは覚えろ」と何度も口を酸っぱくして言っても、水が洩れるように知識が消えていく印象が強かった。それは恐らくは、漢文をあまりに自分の日常や感性と関わりのないものとして生徒が捉えていたからではないだろうか。目の前で、何とか自分の心情を表現する言葉を探す姿を見てい

て、私はこれまでの自分の授業を反省した。「興味を持たせ、心を引き出す授業」の欲求を生徒は喪失しているのではなく、ただ単に機会が少なかつたにすぎないのではないだろうか。漢文が日常的に遠いものとなりつつある現代だからこそ、実は数少ないチャンスをお大事にするという発想で、もっと創意工夫を授業ですべきであったと自戒している。

平成九年度三年生創作漢詩秀作集

十二月に君たちが創作した漢詩の中から何首か抜き出して披露しよう。基本的には、明らかに読み違えを起こしそうな誤った表現以外は、僕の手は加わっていない。また、書き下し文は君たち自身が付けたものである。僕の若干の感想も添えておく。

落葉散地 面  
風吹季節行  
吾今決断時  
惜別離故郷

落葉地面に散り  
風吹きて季節は行く  
吾今決断の時  
別れを惜しみて故郷を離る

男子の作品。高校を卒業すればそれぞれが別々の道を歩む。故郷に残る者もあれば離れる者も居よう。自らの決断の下、悔いなく生きていってほしい。

初詣北風冷  
合掌飲甘酒  
我祈必合格  
籠心買御守

初詣 北風冷たく  
合掌して甘酒を飲む  
我必ず合格せんことを祈り  
心を籠めて御守りを買ふ

女子の作品。入試を前に、神仏に合格祈願をする姿だろう。「甘酒」とか「心を籠めて」という言葉に女性の柔らかさがよく出ている。

春朝不造影  
屋根子雀遊  
胸中光不入  
地上足進憂

春の朝は影を遣らず  
屋根には子雀遊ぶ  
胸の中光入らず  
地上では足が憂に進む

女子の作。「受験がいやだな」という思いという自注が付いている。結句の語順がおかしいが、起句の「春の陽光の柔らかさに自分の歩く影もかすかーだ」という捉え方は秀逸。こんな表現に出会うと、枯渇しかか

この他にも良い表現を持った詩もいくつかあったのだが、讀が合っていないか、途中で終わったりで、残念な思いがしたのも多かった。作ってみれば漢詩も短歌や俳句と同じく、自分の心を表現する手段としては身近なもの。機会があればこれからも挑戦してほしい。

風下六甲山  
氣上甲子園  
彼率猛虎軍  
求勝燃闘魂

風は下る六甲の山  
氣は上る甲子園  
彼率いるは猛虎の軍  
勝ちを求めて闘魂を燃やす

男子。ここでの「彼」とは現在では「吉田監督」のことらしいが、このまま甲子園球場での応援歌になりそうなりズムは、起句承句での対句がもたらすものか。

冬夜我憶君  
寂空輝星流  
淚落部屋隅  
再会独祈求

冬の夜我君を憶ふ  
寂空輝星流る  
涙落つ部屋隅  
再会独り祈り求む

やや感傷的ではあるが、詩でなければ言葉にはならなかつた心境ではないかと思う。こんな気持ちに昔なつたなあ、とこれは私の感傷。

冬、嫩草木枯  
恋春桜花望  
吾今超腰痛  
嗚呼寒早行

冬、嫩しく草木枯れ  
春を恋ひて桜花望む  
吾は今超腰痛  
嗚呼寒さよ早く行け

軽く作ればこんな感じか。男子の作、「超腰痛」の口語表現が面白い。

### 三 コンピュータによる四声・平仄検索

平仄は考えないという前提で始めたのだが、生徒がこれだけ興味を持って取り組み、内容的にも満足できる詩を作ってくれると、やはり欲が出てくる。「平仄合わせ」まで実際に進められるかどうかは別にしても、平仄の規則が分かるまでにはしたい。しかし、どうやって平仄を調べさせるか。漢和辞典で一字一字四声を確認させる方法は、生徒の辞書を引く遅さを考えると、それに伴う意欲の減退の方が私には心配だった。

漢和辞典を引くことの学習効果、知識や興味の広がりなどを否定するのではない。しかし、漢和辞典は同義語、類義語を調べるなど詩の内容の深化のために使うべきで、平仄や韻目などの(高校生にとっては)形式的な項目を調べるだけのためなら他にもっと効率の良い手段があってもよいと私は思う。「詩語表」や「平仄辞典」があれば便利ではあるが、生徒が使いこなせるかどうかを考えると、効果は疑問だ。

「楽して出来る平仄調べ」、専門家に聞かれたら叱られそうなこの課題を解くために私が考えたのは、コンピュータを使うことだった。漢字の持っている様々な情報をデータベース化すれば、キーボードから漢字を入力・検索することで、その情報を即座に閲覧できるはずだ。幸い、本校にはノートパソコンが前年度に二十台導入され、授業等で生徒が利用できるようになっていた。更に、現在の高校生は小・中学校でコンピュータの操作を学習しており、漢字入力に抵抗感はない、逆に興味の方が強いとも思える。これらの条件から考えて、コンピュータを使用することが最

善とし、ひとまずの方向性は決まった。

ところが、市販の教育ソフトやデータベースを調べても、四声・平仄・韻字表という私の希望条件に合うようなものはやはり見つからない。ならばいっそ自分で作った方が融通の利くものになるだろうと、プログラム作成に向かうことにしたわけである。

データ入力は時間さえ使えば出来上がることは予測できたので、問題は検索に使うコンピュータ言語(もしくはアプリケーション)を何にするかだった。色々検討し、今回はインターネットのホームページに使用されているHTML言語を用いることにした。ホームページ閲覧用のブラウザソフト(主流のマイクロソフト社やネットスケープ社からは現在無料で配布されている)さえあれば、他には特別なソフトは不要、つまり費用がかからないことと、将来的にホームページを公開して卒業生や一般の人も閲覧・利用できるようにしたいという希望を私が持っていたことが、選択の理由であった(尚、HTML言語は漢字検索などのデータ処理機能を持っていないので、今回は「Java Script言語による付加命令も使って処理させることにした)。

データ化した漢字数は約三千(「常用漢字」約二千に、使用頻度が高いと思われる漢

漢字	平仄	四声	韻目	韻番	読み	用法
中	○	上平声	一東	1	ちゅう なか	中・内部
中	●	去声	一送	60	あたる	当たる・命中する

「中」の字を検索した時の表示例

字約千字を追加した、十分な数とは言えないが、インターネットでのファイルの読み込み時間を考えると、実用上、妥協できる範囲と思われる。

それぞれの漢字には次の六項目の情報を与えた。

平仄：平声は○、仄声は●で示した。

四声：平声・上声・去声・入声の区別を示した。

韻目：「一東」「三〇寒」など、「平水韻」の分類に従った。

韻番：百六の『平水韻』による分類を、「上平声一東」から順に番号をつけて、「韻目表」の表示に使えるようにした。

用法：意味の違いによって四声が変わる場合などに表示。

読み：音と訓。

\*

ホームページの構成は、高校生以上を対象にして、漢詩（創作）に関する知識が総合的に理解できるようにと、以下のような項目を立ててページ（画面）を組み立てた。

漢詩の歴史：漢詩の発生から唐の時代までの漢詩の歴史を整理し、著名な作品については閲覧できるようにした。

漢詩の形式：古詩と近体詩（絶句・律詩）について、基本的な形式を説明。

漢詩の音韻：四声の区別、押韻の決まり、平仄の一般的な規則とそのパターン例をまとめ、初めての人でも平仄の規則が分かるように整理した。

漢詩の実作：この画面で平仄と韻目の検索機能を使う。調べたい漢字を入力すれば、その漢字の平仄と四声が表示される。また、「韻目表」もここに添えたので、その漢字と同じ韻目に属する漢字の一覧

の表示もできる。

したがって、この両機能を使えば、押韻と平仄合わせが可能となる。

#### 四 平仄検索の実践

このプログラムを用いて古典作品の平仄を調べさせることを、三年生文系の漢文の授業で実施した。教科書に載っている作品が生徒にも馴染みがあった一番良いのだが、平仄の規則に必ずしも一致していない場合も多く、「へー、ちゃんと規則通りに作られているんだなあ」と生徒に感動を与えるためには、正格の作品の方が良い。今回は、五言絶句として王之涣の『登鶴鵲樓』、七言絶句として李白の『早發白帝城』、五言律詩として杜甫の『旅夜書懷』の三首について、それぞれの詩の平仄調べを課題とした。

コンピュータの使い方をまず説明し、漢字の入力と変換の操作、この平仄検索ソフトの使い方を指導した上で、資料345を用意し、時間を与えて調べる作業を始めた。

先述したように、生徒用にはノート型パソコンが二十台なので、クラス全員が使うわけにはいかず、二人で一台、交代して使うこととし、コンピュータを使っていない者は漢和辞典を引いて調べるように指示をした。生徒の方は慣れて来るとコンビネーションも良くなり、「この字はコンピュータに入っていないみたいだから、辞書で調べておいてよ。私の方は次の字を検索するから」と分担をしたりして、要領よく作業をしていた。約三十分程の間だったが、後で集約したところ、課題の三首の内、二首まではほとんどのペアが調べ終えていた。中には、三首とも完了して、更に追加の詩まで調べていた者も三割程いた。この程度の短時間

漢詩創作講座

漢字の発音について

漢字の一字一字は全て一音節の発音を持っています。最初の字音(「平」と言います)を除いた残りの部分で「韻」と言います。詩を讀むに際しては、各句の最後の字には、同じ韻を持っていた字を揃えようという決まりがあり、古体詩の頃から自然に生まれてきました。これを「韻を踏む」「押韻させる」と言い、韻を踏んでいる字を「韻字」と呼びます。

漢字の一字一字には、声調の他に、声調と呼ばれるものがあります。発音は同じでも、声調が違うと意味が大きく異なることもありますが、詩に重要になります。声調を分類すると次の四つになるため、合わせて「四声」と呼ばれています。

- 平声(ひょうしやう) ……高い音で平らに発音する。
- 上声(じやうしやう) ……あがる調子。
- 去声(きよしやう) ……下がる調子。
- 入声(にっしやう) ……短く詰まった発音。(日本語の漢字音読みで末尾が「フツクチキ」になる字だと一般に覚えられています。ただし、旧仮名遣いでは)

それぞれの漢字が「四声」のどこに属するか、また、どのような「韻目」に属するかを知るためには、「韻目表」で調べることがあります。日本語での漢字の発音は、そもそも中国語とは異なり、漢詩での「四声」や「韻目」の分類は基本的に漢語の発音を基準にしています。

中国では「宋」の時代に「広韻」と言われる、漢字を二百六の発音に分類した韻書が出されました。これが「四声」の時代の詩は、全ての漢字が「平水韻」という韻書に分類されたことになりました。しかし、日本でも江戸時代以後は「平水韻」を基準にして漢詩が作られてきました。

漢詩の「平水韻」を知るには「平水韻」を参考にするとよいのですが、実用上は「平水韻」でも破れないための漢詩の多くは「平水韻」の六百六の韻で表記してあります。また、四角に囲まれた漢字が「東」という韻目分類を示すもので、四角で囲まれた中の漢字が「東」の韻目に入ります。この場合は、それが「東」という韻目に属する字だと分かります。また、二角に斜線が入った漢字は「東」の韻目に属する字だと分かります。また、三角に斜線が入った漢字は「東」の韻目に属する字だと分かります。

- ① 近体詩を作る場合には、平字と仄字をどのような順番に並べるか、また、前後の平仄の関係などから、守るべき決まりがいくつかあります。簡単に列記します。
- ② 「二四不問」 それぞれの句の二日目と四日目、四日目と二日目には必ず仄字にします。逆の場合も同じです。
- ③ 「二六対」 七言詩の場合、それぞれの句の二日目と六日目は同じ平・仄にしなければなりません。
- ④ 「三五論ぜず」 それぞれの句の一日目、三日目、五日目については、それぞれ平・仄いずれでもかまいません。
- ⑤ 韻を踏まない句は、韻字と逆の平仄にします。
- ⑥ 孤平を忌む ⑦ 三平を忌む ⑧ 下三平を忌む ⑨ 〇〇〇のように、平声が仄声に挟まれるのを避けます。孤仄はそれほど厳しくは禁止しません。
- ⑩ 最後の三字を平字ばかりにするのも避けられます。孤仄と同じく、仄字の下三連については、それほど厳しくありません。
- ⑪ 押韻を禁ず 押韻と同じ韻目に属する字を、脚韻以外の場所に使うことも禁じられています。
- ⑫ 反法・粘法 反法：初句二日目と平字とする、四日目は仄字になります。その場合、次の二日目は逆の順序となり、二日目は仄字、四日目は平字となります。このように、二四六日目の平仄が前の句と逆転する場合を「反法」と言います。
- ⑬ 粘法：二日目と四日目、四日目と二日目が平字の時、三日目は二日目が仄字、四日目が平字となります。このように、二四六日目の平仄が前の句と同じになることを「粘法」と言います。
- ⑭ 絶句の場合、初句と第三句が前の句と同じになることを「粘法」と言います。
- ⑮ 律詩の場合は、絶句の関係が繰り返されると思って下さい。
- ⑯ 対句の場合は、韻脚(三句目と四句目)、韻脚(五句目と六句目)が原則として対句となります。その他が対句となる場合もあります。

資料3 漢詩創作講座

具体的平仄の例

「二四不問」「二六対」「反法・粘法」「孤平・下三平の禁」などの鉄則を守っていくと、平と仄の並び方が大体決まってくる。初句の二日目が平の場合を「平起(ひょうしやうおこり)式」、初句二日目が仄の場合を「仄起(せきおこり)式」と言います。また、初句と二日目は原則として二四六日目が逆になります。それぞれについて、次のパターンがあり、△は韻字、○は韻字、△は平・仄どちらでも構わない字) パターン例は全て韻字を平字(平韻)としています。仄韻の場合もあります。

- 【五言絶句平起式】 △○○○◎ △○○○◎ △○○○◎ △○○○◎ △○○○◎
- 【五言絶句仄起式】 ○○○○△ ○○○○△ ○○○○△ ○○○○△ ○○○○△
- 【七言絶句平起式】 △○○○○○◎ △○○○○○◎ △○○○○○◎ △○○○○○◎ △○○○○○◎
- 【七言絶句仄起式】 ○○○○○○△ ○○○○○○△ ○○○○○○△ ○○○○○○△ ○○○○○○△
- 【五言律詩平起式】 △○○○○○○◎ △○○○○○○◎ △○○○○○○◎ △○○○○○○◎ △○○○○○○◎
- 【五言律詩仄起式】 ○○○○○○○△ ○○○○○○○△ ○○○○○○○△ ○○○○○○○△ ○○○○○○○△
- 【七言律詩平起式】 △○○○○○○○○◎ △○○○○○○○○◎ △○○○○○○○○◎ △○○○○○○○○◎ △○○○○○○○○◎
- 【七言律詩仄起式】 ○○○○○○○○○△ ○○○○○○○○○△ ○○○○○○○○○△ ○○○○○○○○○△ ○○○○○○○○○△

次の各詩の平仄について、漢和辞典やコンピュータを用いて確認しよう。

【五言絶句平起式】 白日依山尽 黄河入海流 欲上青天揽明月 仙人下处苍烟横	王之涣	白日山に依りて尽き 黄河海に入りて流る 更に上る一層の楼
【七言律诗平起式】 早发白帝城 朝辞白帝彩云间 千里江陵一日还 两岸猿声不住住其间 轻舟已过万重山	李白	朝に辞す白帝彩雲の間 千里の江陵一日にして還る 兩岸の猿声住まざるに 輕舟已に過ぐ万重の山
【五言律诗】 旅夜書懷 杜甫 細草風生古木涼 清江夜雨石灘响 星垂平野大 月動大江流 名是文章老 官心空手秋	杜甫	細草風生の岸 危橋獨夜の舟 星垂れて平野闊く 月動きて大江流る 名は堂に文章もて著はれんや 官は空にして何の似る所ぞ 天地の一沙塵

資料4 平仄の具体例と演習

平仄調べ用紙  
 次の漢詩の各句の横に、「平仄を調べて、「平字」は○、「仄字」は●、「韻字」は◎、「韻字」は◎を付けよう。

登鶴樓 王之涣	旅夜書懷 杜甫
白日依山尽	細草微風岸
黃河入海流	危檣獨夜舟
欲窮千里目	星垂平野闊
更上一層樓	月湧大江流
早發白帝城 李白	名豈文章著
朝辭白帝彩雲間	官應老病休
千里江陵一日還	飄飄何所似
兩岸猿聲啼不住	天地一沙鷗
輕舟已過萬重山	

右に挙げた例詩の他にも、興味のある詩があれば、調べてみよう。

竹里館 王维  
 獨坐幽篁裏 弹琴復長嘯 明月來人相照 照入前川流

靜夜思 李白  
 床前明月光 疑是地上霜 舉頭望明月 低頭思故鄉

秋浦歌 李白  
 白髮三千丈 隨風不用梳 不知何處去 明鏡雙雙落

空山人不見 但逐夕陽紅 返景入深林 復照青苔上

白雲千里外 明月滿孤舟 何處是歸心 西望故鄉愁

花夜始 蘇東坡  
 風光不與四時同 只有清和似仲冬 雨後風生涼意足 夜深月白曉光紅

萬里江山入眼明 孤舟短棹任飄零 江空雲淡秋光老 雁叫霜寒木葉聲

資料5 平仄調べ用紙

で平仄が調べられるのなら、機能としては十分と言えます。

自分や友人の名前の平仄を調べている生徒、韻字表の漢字を一つずつ発音して、同じ韻だということを納得したり、首をかじげたりしている生徒、「漢詩って漢字のパズルみたいだね、先生」と面白がる生徒、「せっかくだと押韻したのに、返り点つけたらかわいそうだね」としみじみ話す生徒、私のこれまでの漢詩の授業での反応とは全く異なるものであった。それらは確かに、漢字や漢詩への興味や知識を拡げるきっかけとなっていたらうし、生徒を主体とした生き生きとした授業を展開する可能性を示してくれていた、と思う。

五 まとめ（教育とインターネットの可能性）

ここ数年のインターネットの急速な普及・発展がもたらした情報の大衆化は、現代社会の膨大な情報と人間の関わり方を変えつつある。教育についてもそれは例外ではない。

この漢字検索のホームページに、漢詩の投稿を受け付けるページを追加して、一般向けにインターネットで公開したのは昨年五月である。以来ほぼ一年を経過するが、これまでに投稿された漢詩は既に百首になろうとしている。在日中国人の方からの作品もあれば、十六歳の高校生から八十四歳の方まで、初心者から漢詩創作歴二十年以上という方まで、幅広い層から頂いている。投稿された作品には、出来る限り感想を添えて掲載している。私の意見を参考に修正して、二稿、三稿と送って下さる方もいる。他の方の投稿作品や、高校生の漢詩に温かい感想と励ましを寄せても頂いた。



この一年間、それらの漢詩を通して多くの方と触れ合いながら、教育の媒体としてのインターネットの有効性を私は強く感じました。漢詩を作って投稿し、添削を受けた後に一般に公開され、それに対して更に多くの人からの感想を得る、このような双方向型の、ホームページとメールを利用した教育手段もこれからの一つの方向ではないかと思っっている。いつでも、どこからでも、誰でも、自分の欲しい情報が手に入る、というインターネットの特性は、「生涯学習」の一分野としても十分機能する筈である。

私のホームページを見た卒業生が、次のようなメールを送ってくれた。卒業して八年、彼女は現在、北海道の大学院で獣医の勉強をしている。

ホームページ見ました!!。  
先生のホームページを見ても、漢詩は暗号のように見えるし。何だかあまりにわからなくて、思わず「チャート式漢文」なんぞ購入してしまいました。  
今勉強を始めると、何でも面白く思えるのですよね。高校生の時は見るのもいやだったのに。私の人生の中で、はじめて漢詩の勉強をはじめたわけです。まだまだ勉強を始めたばかりなので投稿なんてとてもできませんが…。  
先生のホームページも楽しみにしているので、どんどんパワーアップしていった下さい。

これぞ生涯学習、私は素直に教員としての喜びをかみしめさせてもらった。

\*

漢詩を作ることは誰にとっても簡単なことではないし、高校生にはましてやである。だが、初めから絶句が無理なら、韻だけを指定しての「一句創作（柏梁体）」、起句承句あるいは転句結句だけの「二句創作」などから始めても良い。和習（臭）やら文法間違いがあっても、それ以上に高校生の生き生きとした感性が表現されているなら良いじゃないか、という太っ腹。これに工夫が加われれば、漢詩創作の授業はスタートできる。

漢詩や漢字の表現力や魅力を身近なものと感じ、季節の変化や人生の折々での生活感情と漢詩との関わりを大切にすると、それが千二百年以上もの長きに渡って日本人が愛し守ってきた「漢詩文化」の伝統であろう。

まだまだ未完成の拙い実践ではあるが、伝統を未来につなぐわずかの役割でも担うことができるならば、幸いだと思っっている。尚、「漢詩創作のホームページ」のアドレス（URL）は、現在は次の通りである。

<http://www.chitanet.or.jp/junji/kansi.html>

ご覧いただければ幸いです。

（本稿は、98年度漢字文化振興会主催論文懸賞における優良賞受賞論文を加筆修正したものである。）